「主体的に行動し、自分の命は自分で守ることのできる児童の育成」

平成 25 年度 高知県実践的防災教育推進事業 拠点校　黒潮町立佐賀小学校

Ⅰ　学校における背景、問題意識

黒潮町佐賀は、土佐カツオ一本釣り漁業でも有名であると同時に、シメジやエノキダケなどの栽培も盛んで、自然の恩恵をたくさん受けながら栄えてきた町である。しかし、南海トラフの巨大地震による推計値は、最大震度７、想定される津波浸水深約 15～20m（条件が重なれば 34.4mの津波来襲も想定）、30 ㎝の津波到達時間約 10 分とされ、たいへん厳しい数字となった。本校は海抜 6.1mに位置し、近くに海岸と河川があり、せまい道路に崩れやすい壁など、昔ながらの町並である校区の状況を考えても、防災教育を進めることは喫緊の課題となった。

これを受けて、本校では平成 24 年度に高知県学校防災アドバイザー派遣事業を、平成 25 年度は高知県実践的防災教育推進事業の指定を受け、取組を進めてきた。隣接する佐賀中学校も同じ指定事業を受けており、避難訓練や年間計画、授業展開について連携を深めながら、防災教育の充実・発展に努めてきた。

Ⅱ　取組のポイント

◆各学年の『地震・津波・防災』に関する授業研究
◆様々な場面を想定し、保小中との連携を図った避難訓練の実施
◆防災キャラクター作成
◆防災意識の高揚をねらったアプローチ

Ⅲ　取組の概要

１　佐賀小の防災教育の目標

主体的に行動し、自分の命は自分で守ることのできる児童の育成

①危険予測と正しい判断、主体的な行動（判断力・行動力）
②他者との協力、地域の安全・安心への貢献（協力・貢献）
③災害発生のメカニズムや防災体制の理解と活用（知識の習得と活用）

２　防災教育　推進の視点

【A】防災リテラシー
・災害発生時の身を守る方法
・災害発生時に自分で考え、適切に判断・行動できる実践力
・災害を乗り越えるために他者と助け合う共生力（生活・社会・保健・特別活動・総合的な学習の時間・学校行事）

【B】人間としての生き方
・命を尊重する心の育成
・自然を愛し、自然環境を大切にする心の育成
・他者を思いやる心の育成
・ボランティア活動に積極的に参加しようとする心の育成（生活・国語・社会・保健・道徳・特別活動・総合的な学習の時間）

【C】科学的理解
・自然災害の種類と発生のメカニズムについての理解
・地域災害の歴史と対策についての理解
・今後の防災体制の確認（生活・社会・理科・総合的な学習の時間・学校行事）

３　取組内容

（１）各学年の『地震・津波・防災』に関する授業研究

上記１の防災教育目標を達成するために、上記２の推進の視点と学年別の重点目標及び指導内容等を体系化した「防災教育全体計画」に基づいて防災教育を展開した。防災の授業の学習内容や指導方法の開発・研究を進めるために、次のことを行った。

①防災教育年間指導計画の作成

各学年の教科・領域における防災の学習内容を整理し、その推進の視点を明確に位置付けた。

５年　防災教育年間指導計画

防災教育重点目標	災害が発生したときに、自ら適切な行動ができるとともに、他の人々の安全にも気配りができる。			
防災教育推進の視点	【A】防災リテラシー ・災害発生時の身を守る方法 ・災害発生時に自分で考え、適切に判断・行動できる実践力 ・災害を乗り越えるために他者と助け合う共生力	【B】人間としての生き方 ・命を尊重する心の育成 ・自然を愛し、自然環境を大切にする心の育成 ・他者を思いやる心の育成 ・ボランティア活動に積極的に参加しようとする心の育成	【C】科学的理解 ・自然災害の種類と発生のメカニズムについての理解 ・地域の災害の歴史と対策についての理解 ・今後の防災体制の確認	
月	防災教育関連行事	教科	道徳	総合的な学習	学活
4	年間指導計画作成 校区・通学路の安全確認 学級連絡網作成 避難訓練（授業中・地震・津波）地区別集団下校	理科：天気の変化【C】 社会：わたしたちのくらしと国土【C】 家庭：見つめよう！家庭生活【B】	愛のリレー【B】	町と防災【B】 ・自然現象と災害	災害への心構え①【A】 ・地域の避難場所を知る
5	避難訓練（遠足中・地震・津波） 地区別集団下校 防災教室(万引き)(1･2年) 交通安全教室	国語：ゲストティーチャーをすいせんしよう【C】	命のアサガオ【B】	町と防災【C】 ・震災①（昭和南海地震）	災害への心構え②【C】 ・南海地震と津波について知ろう
6	避難訓練（地震） 薬物防止教室（５・６年） 心肺蘇生法・防災講演会	体育：体力を高める運動【A】 体育：水泳【A】 図工：防災ポスター【A】	ボランティアクラブに入って【B】	町と防災【C】 ・震災②（東日本大震災）	人権標語【B】
7	携帯電話教室（６年） 避難訓練（保・小・中）	家庭：地域の人との関わりを考えよう【B】 体育：水泳【A】	父の言葉【B】		夏休みの過ごし方【A】
8	家族防災会議				
9	防災避難訓練（地域）	体育：着衣水泳【A】		町と防災【A】 ・震災③（避難経路）	
10	避難訓練（保・小・中）	理科：台風と天気の変化【C】	言葉のおくり物【B】	共に生きる【B】 ・佐賀の産業	災害への心構え③【A】 ・津波のからくり
11	避難訓練（火災） 避難訓練（地震・津波）	理科：流れる水の働き【C】 国語：森林のおくりもの【C】 体育：持久走【A】	命【B】	共に生きる【B】 ・佐賀の漁業	災害への心構え④【A】 ・津波から逃げる
12	非行防止教室（３・４年） 非常食体験	社会：情報の中に生きる【A】			冬休みの過ごし方【A】
1	避難訓練（地震・津波） 防災学習発表会	保健：心の健康【A】	稲むらの火で命を救え【B】	共に生きる【A】 ・災害への心構え	災害への心構え⑤【A】 ・地震対策を考えよう
2	起震車体験 避難訓練	国語：メディアと私たちの関わりについて考えよう【A】	牛乳配り【B】	共に生きる【B】 ・１年間のまとめと発表	災害への心構え⑥【B】 ・避難生活を考えよう
3	避難訓練	社会：環境を守る人々【B】		共に生きる【C】 ・植樹体験	

②研究授業の実施

「防災教育年間指導計画」に沿って防災の授業を展開する中で、「高知県安全教育プログラム」に基づいた学級活動の研究授業を年間３回実施した。佐賀小学校の児童に「自分の命は自分で守る力」を身に付けさせるための指導方法について、避難訓練との関連を考えながら研究した。

＜２年＞「津波から身を守るには？」

【２年　学級活動　授業　板書】

＜３年＞「南海地震が来たらどうなるの？」

＜５年＞「津波から逃げる」

授業後の研究協議は、ワークショップ型のグループ協議を取り入れた。「児童の活動」「教師の活動」「本時の目標に関して」という３つの視点でグループに分かれ、各自が良かった点と改善点を付箋に書き、模造紙に整理しながらまとめた。

そして、代表が全体で発表し、講師による助言をいただくという、成果や改善点が明確になるような流れを設定した。

【校内研修　研究協議の様子】

（２）様々な場面を想定し、保小中との連携を図った避難訓練の実施

本校では、避難の際の約束として下記のような合言葉を用い、率先避難者として迅速に最善を尽くす避難行動のとれる児童を育成している。そのために、様々な状況を想定した避難訓練を実施し、危険予測と正しい判断、主体的な行動力を培うことをねらってきた。

佐賀小の避難の約束
合言葉は「おとしだま」
お・・・おさない
と・・・とまらない
し・・・しゃべらない
だ・・・たよらない
ま・・・またない

【地震・津波等を想定した避難訓練】

＜**第１回**＞４／25（木）授業中
＜**第２回**＞５／２（木）校外活動中（春の遠足時）
＜**第３回**＞６／11（火）掃除中
＜**第４回**＞７／５（金）休み時間中

第１回保小中合同避難訓練
・Ｊアラート活用
・高知県立大学大村誠 教授による講評と講演

＜第５回＞10／18（金）昼休み中
第２回保小中合同避難訓練
・Ｊアラート活用
・避難途中に６年生が保育園４・５歳児の手を引いて、最終避難場所まで避難をサポート

・訓練後、小中合同消防訓練
『簡易担架の作り方・骨折等の応急処置』(黒潮消防署)

＜第６回＞11／14（木）休み時間中
告知なし避難訓練

校庭でダンゴムシのポーズで身を守る

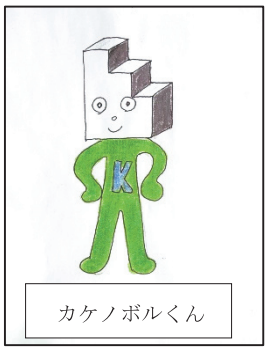
＜第７回＞12／６（金）非常食体験
小中合同でアルファ化米炊き出し

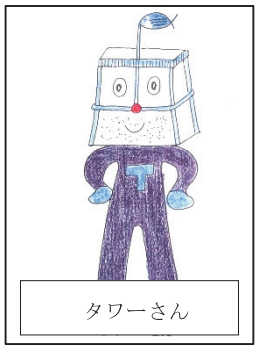
＜第８回＞１／８（水）下校中

（３）防災キャラクター作成

①佐賀小オリジナル防災キャラクター

年度当初に佐賀小教員が防災キャラクターを考案し、様々な場面・教材等で活用した。子どもが意欲的に自ら考える防災教育を進めるために、親しみやすいキャラクターにした。キャラクターは、顔が避難路階段の「カケノボルくん」、津波避難タワーをイメージした「タワーさん」等４種類ある。





【佐賀小オリジナル防災キャラクター】
※『オガタマさん』は、佐賀小校章になっている「おがたまの花」から命名している。

②防災キャラクターの活用事例

ア）案内板として・・・

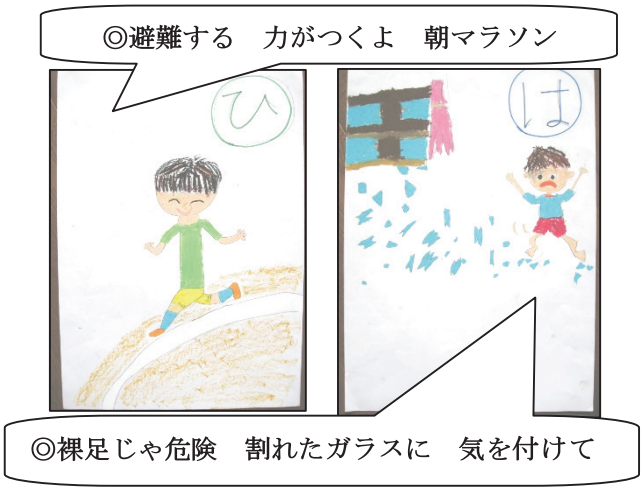
児童が防災キャラクターを使って案内板を作り、校内外に設置した。避難経路を示す目印として、保育所や中学校、役場等にも掲示した。

イ）運動会でも・・・

秋の秋季大運動会で、保護者が防災キャラクター着ぐるみを制作し、防災種目に取り組んだ。児童から注目を集め、防災意識の高揚にも一役買っている。

（４）防災意識の高揚をねらったアプローチ

①防災カルタ



②防災ポスター

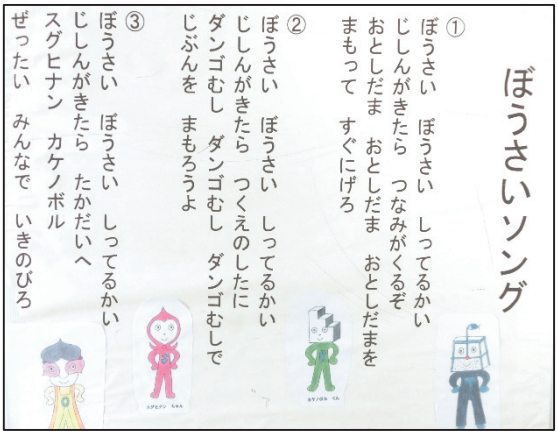
③防災標語

１年	たかい山まで　いそいでにげる
２年	がんばろう　ひなんのときは　おとしだま
３年	つなみはね　流れが速いぞ　気をつけろ
４年	いつか来る　つなみや地しん　いざ訓練
５年	しゃべらずに　確かな情報　聞き動く
６年	知っておこう　自分がにげる　ひなん場所

④防災ソング

音楽主任と児童たちが防災ソングを作成した。１番の歌詞を２年、２番を６年、３番を５年が考えた。

児童が楽しく防災を学べるように、音楽の教科書にも載っている米国民謡「こいぬのビンゴ」のメロディを児童が替え歌にし、『ぼうさいソング』を完成させた。また、佐賀小独自の避難行動の標語『おとしだま』（おさない・とまらない・しゃべらない・たよらない・またない の頭文字）や揺れから身を守るダンゴムシのポーズを取り入れた歌を制作した。


ぼうさいソング

①
ぼうさい　ぼうさい　しってるかい
じしんがきたら　つなみがくるぞ
おとしだま　おとしだま　おとしだまを
まもって　すぐにげろ

②
ぼうさい　ぼうさい　しってるかい
じしんがきたら　つくえのしたに
ダンゴむし　ダンゴむし　ダンゴむしで
じぶんを　まもろうよ

③
ぼうさい　ぼうさい　しってるかい
じしんがきたら　たかだいへ
スグヒナン　カケノボル
ぜったい　みんなで　いきのびろ

Ⅳ　成果と今後の取組

１　成果

○遠足、掃除中、休み時間等、色々なパターンの避難訓練を繰り返すことで、災害時の様々な状況を感じることができ、素早い避難の仕方を身に付けることにつながった。

○避難後の生活に関心が広がる児童が出てくる等、防災をより身近な問題として捉える児童が増えた。

○全学年が計画的に防災の授業に取り組むことで、発達段階に応じた防災意識を育てることができた。

○防災ポスター、防災標語の取組は知識を行動化する第一歩であり、防災授業で知り得た知識を具体化する手掛かりとしては有効であった。

２　今後の課題

●合言葉である「おとしだま」のさらなる徹底が必要である。特に「し（しゃべらない）」と「ま（またない）」。

●授業の間隔が開きすぎたり、集中して学習しすぎたりして、児童の受け止め方に個人差が生じた。

●登下校の時間帯の避難の仕方に不安がある児童が多いと考えられるので、家庭や地域との協力体制を根気よく作り上げなければならない。

●参観日等、保護者が学校に集まる時に避難訓練をする等、より三者が関わることができる工夫を考えたい。

●家庭への啓発が求められる。また、学校での学びを家庭に持ち帰って、家族と話し合う習慣を身に付けさせることも進めたい。